

## 大会宣言(案)

「あたらしい一年生、先生、楽しみですね。とうま、ゆうた、はるき、ゆめこ、さかもと、あとわかしかたください、ありがとうございます」(原文ママ 名前は仮名)

今年の三月。当時、中学二年生だった生徒が、異動する私に向けて書いてくれた手紙の最後の文です。この年、学級には三年生がいなかったの、いよいよ自分たちが最上級生になるという意欲と期待に満ちて、一方で不安や緊張もある時期だったと思います。そんななかでの担任の異動。「なんてだよー」という思いもあったるうに、出てきた言葉は「まかしてください」でした。そしてその前には仲間全員の名前がありました。さらにまだ見ぬ新入生たちのことも。言葉はたどたどしいですが、この短い文の中には仲間への、そして自分自身への信頼と期待が詰まっています。一緒に過ごしてきた二年間という時間がそれらを支え、創り上げてきたのだと感じ、胸が熱くなりました。

出会った頃の彼らは何をすることも力が入らず、いわゆる「シャキッとしない」「ダラダラした」子たちで、所かまわず座り込んだり寝転んだりすることもありました。そこには「どうせ自分たちにできることなんてない」という、自分に対してや世の中に対しての期待のなさがあると感じました。そんな彼らに、自分たちで考えて動くことでやりたいことが叶うという経験を積んでほしい、そして世の中にはゲームや動画のほかにも面白いことがたくさんあるということを知ってほしいと考え、様々なことに取り組んできました。年間を通してのマンホールカード集め、校外学習でアイスを食べるために書いた保護者への「要望書」、キーボードで練習した一人一人の弾けるようになりたい曲(戦隊ヒーローから野球選手の応援歌まで)、そして何より毎日の「楽しくてわかる授業」…。

そこにあっただのは「体幹を鍛える訓練」でも「手はひざの上」などの〇〇スタンダードでもありません。子ども自身が「なりたい自分」を叶えるために動き出すスイッチを入れるのを待ちながら、様々な文化や科学に出会わせる。しかけ“を準備し、いちおう口では「シャキッとしないよ」と言いながらも「ダラダラ」を受け止める日々でした。

そんな二年間を経ての「まかしてください」という言葉。きっとそこには「この仲間でいろんな勉強をして、いろんなチャレンジをしてきた。だからこれからもこの仲間と、そして新しい仲間と、楽しく成長していくよ」という思いがこもっているのだと信じています。

今、学校では、子どもも大人も急かされています。特別支援教室・通級でも学級でも、目に見える変容を短期間で求められるため、子どものねがいを置き去りにした「ねらい」が設定され、「訓練」や「修行」が行われているような事例が聞かれます。また、手段の一つであるはずのICT教育は、まるでそれ自体が「目的」であるかのように崇められ、一人一人が画面に向かって黙々とタブレット端末を操作することが良しとされる流れもあります。学校本来の意義が薄められ、学校が学校でなくなっていくように感じます。教育条件も悪化しています。困難を抱えた子どもたちや保護者が増える一方で、教職員の数も教室も足りません。特別支援教育を受ける子どもたちや担当する教職員を軽視するような学校運営の事例も後を絶ちません。

学校は、仲間とつながり、安心して学ぶ場所。ゆっくりでも、ダラダラしながらでも、自分自身で「なりたい自分」に近づくことを支えてくれる場所。そんな学校・教室・学級をつくるために、私たちは手をつなぎ、学び合い、粘り強く願いを訴え続けていきたいと思います。子どもたちの発達への願いと可能性とを信じて。

二〇二六年六月二十日